鄭思礼著
［中国伝統文化叢書］
性文化—千年不解之結

中国対外翻訳出版公司／1994年1月／501頁／16元

高　明潔

一　本書の内容構成

『中国伝統文化叢書』は、一九八〇年代後半より編集し出版されていた伝統文化の内容に関する叢書である。本書以外にすでに出版されているものには『老子——伝奇的一生——』『八掛——文化与遊戯——』『浅文言——書信中的応用——』『数字——神奇的含義——』などがある。叢書に所収されている諸書の内容構成は、いずれも学術的な専門研究をもとにその研究を一般化したものであるとみられる。本書は以下の内容より構成されている。

導　言　轟動京都的《油画人体芸術大展》
第一編　中国社会性控制的張弛軌跡
第一章　性文化的寒暑表／　第二章　中国的伊甸園／第三章　鄭衛之風　荊楚之俗／第四章　人的覚醒和性的覚醒／第五章　風流総被風吹雨打／第六章　鉗制与反鉗制／第七章　六十年怪圏／第八章　瞧這条軌道
第二編　中国性文化的観念形態
第九章　熊掌和魚／第十章　万物負陰而抱陽／第十一章　洒家从何処悟禅／第十二章　人欲与天理／第十三章　原来姹紫嫣紅開遍／第十四章　誰領〝風騒〟数千年／第十五章　心霊上的牌坊／第十六章　欲潔何曾潔／第十七章　禁遏放逸両議喧／第十八章　所謂伊人在水一方
第三編　中国性文化的行為形態和心理形態

第十九章　率土之浜 莫非王臣／第二十章　洒向人間都是怨／第二十一章　神聖道徳与原始欲望／第二十二章　誰来傳道受業解惑
第四編　中国性文化的特質
第二十三章　一条咬住尾巴的龍／第二十四章　一個千年不解之結／第二十五章　黄土地上的無花果
尾声　解鈴無須系鈴人
後記　夏夜梧桐雨絲歇

二　本書の内容とその出版について

本書のはじめには、一九八八年一二月末に北京美術館で「油画人体芸術大展」（油絵人体絵画展）が開催された折、『参考消息』（新華社が発行する外国通信社や外国の中国報道などを伝える日刊紙）に載せられたアメリカ連邦新聞社の報道が「導言」（はじめに）として引用されている。

その報道は「千人以上の中国人が中国一流の美術館に駆け込み、そこで開催される裸体画を研究するための北京で初めての『人体画展』で騒いでいる。この大騒ぎをしている絵画展を鑑賞しにきた人々の中には、目に前にあるものが絵であると信じられないような振舞いをする人もいれば、好色な目付きで絵をジロジロ見つめる人もいる。大勢が落ち着いて観賞しており、絵画展を楽んでいる様子は明らかである」といったような内容である。

本書の著者がその内容に基づき、絵画展に非常にショックを与えられた中国人の大騒ぎ、そして、人体芸術が五百年以上の歴史をもつ、西洋人の中国人に対する無理解――「中国不可理解」、というような明らかな対比をもとにし、以下のような問題提起を背景にしてこの書を出版することに至ったと評者は理解する。

まず、著者は五千年の歴史を持つ中国の伝統文化において、それを構成する不可欠な要因の一つであるはずの性文化の位置付けを公正に評価すべきだと指摘している。これまで公の場合では「性観念・性形態・性文化」といったものがもっとも敏感視されており、例えば、「人体絵画展」にショックを与えられた中国人の反応はその代表的な一例である。このため、性に関する文化をどのような視点で理解すれば正当であろうかと著者は問題にしている。

また著者は改革開放以来、中国における文化研究の領域が「文化大反省」といったような思潮に組み込まれ、盛んに行われている「地域文化」や「飲食文化」や「居住文化」などの研究と違い、性観念や性形態などに相応する文化の研究はこのような思潮に組みこまれていない、と問題視していた。

上記のような前提に基づき、著者は『性文化――千年不解之結――』という題名の本を出版することに至っている。しかしながら、この本を出版するに当たり、著者が「尾声」（あとがき）に述べているように「一九八八年の北京の人々にショックを与えた『油画人体芸術大展』はこの本をまとめようとなる契機であったが、……一九八九年から一九九二年三年間の『調整』という時期に入ると、この本を出版することは泡が消えるように実現できなくなった。一九九二年以降、改革開放

が再び訪れてきたことにつれて、……終にこの本の出版を実現した」というような不具合な出版事情もあった。

本書の出版が順調というわけではなかった一九九〇年代半ばまでの様子が、後書きの中に露呈されている。その後中国では「性文化」が伝統文化の一部であると位置付けられ、その研究がある程度まで進んでいるように見える。例えば、『性文化与法』（談大正著、上海人民出版社、一九九七年）、『婚姻、性別与性――一個当代中国農村的考察』（元新邦その他著、八方文化企業公司、一九九八年）などが出版されている。しかしながら、前文に述べられたようにその他の伝統文化に関する諸研究と比べてみると、これまで中国の伝統観念において不健康なものとみなされていた性文化に対する各分野にわたる研究は、今後より一層の研究が必要ではないかと思われる。

三　本書の内容に関する総括

評者は人類学の視点で中国少数民族文化・社会を中心に諸研究を行っている。性文化に関する研究を調べるようになったのは、「中国（中華）伝統文化を形成する諸問題にあたる少数民族伝統文化の位置づけについて」というようなテーマに基づく視点からである。すなわち、歴史上非漢文化的な土着民（少数民族）の文化伝統、儒学や道教などではなく、少数民族がもつ固有な宗教的な文化系統、およびモンゴル族や満族などのような王朝を樹立した非漢文化の民族集団がもつ文化伝統の中に、漢文化と対照的に存在する部分および漢文化と融合し合う部分、そしてそれらが中国全体の伝統文化の中でどのように位置付けられているか等々、を明らかにしようという研究である。

しかしながら、現段階ではこのテーマ、特に性文化に関する研究を本格的に行っていないため、適切に本書を評価することは難しい。にもかかわらず、中国における性文化研究について日本の中国研究者および一般読者にある程度まで提示するために、ここでは評者なりに本書の内容を下記のように総括的にまとめることにする。

(1)　テーマごと提示された資料

本書は中国内外に高く評価されている人類学・社会史・歴史学・社会学の範疇を含むオランダ人の中国学研究者、R・H・ファン・フーリック（R. H. van. Gulik：1910–1967、中国語訳名：高羅佩）の名作である *Sexual Life in Ancient China*（一九六一年。同書には日本語訳本の『中国古代の性生活――先史から明代まで』松平いを子訳、せりか書房、一九八八年、全五一一頁、および漢語訳本の『中国古代的性与社会』呉岳添訳、一九八九年、三聯書店、全四六七頁がある）の影響を強く受けていることが明らかにみられる（以下、『古代中国の性生活』と表記する）。

ただし、研究方法の面では本書は『古代中国の性生活』とは全く違うとみられる。『古代中国の性生活』は歴朝の順番に基づき、各歴朝における性文化の内容と特徴、特に第一次文献資料の内容とその考証、および性文化の時代的変遷についてまとめていた。このような方法に対し、本書では前文に並べられる目次のように、章・節ごとに専門テーマを設けている。

そして、歴史文献の調査研究および現代社会における諸事象に関する社会学的な調査によって、大量の歴史的・現状分析的な資料を用いて、それに内外の各分野にわたる関連研究の蓄積を生かして、そのもとに古代中国社会における性観念や性行為と現代中国社会のそれとの対比的な考察を行っている。

このような各専門テーマに基づいての資料のもとに内容を展開していく方法は、読者に立体的な印象を与えてくれることは評価に値する。その反面、場合によって、各テーマの内容を展開されたその時代的な背景を理解するにあたっては、省略された時代背景への理解が難しい面があると思われる。

〔二〕「万悪淫為首」という伝統的な性観念への批判

〔一〕とも関連するが、本書はR・H・ファン・フーリック氏が『古代中国の性生活』に述べている下記のような指摘をもとにしており、「万悪淫為首」という儒学的な性観念への批判が本書に集約されている。

『古代中国の性生活』の「序言」でR・H・ファン・フーリック氏は、「こんなに高い教養を持ちかつよく思考している民族（漢民族）は、きっと性問題に最大な関心を払うはずだ。しかも古くから彼らは確かにそのようにしており、彼らの観念をそれぞれの『性経』に記入しており……。その後儒学的な厳格な道徳観念がそのような文献の流通を制限した。清朝建立以来、この種の厳格な道徳観念が各種の政治的要因と感情的な要因をもとに、より一層強められるようになってきた……。それ以来、神秘化された性問題がずっと中国人に付き纏うようになった……」と指摘している。[1]

このような見解をもとにして、本書は各章においてテーマを設けていたにもかかわらず、全体においてその内容に一貫しているのは、著者の古代から現在まで伝わっている「万悪淫為首」という儒学的な性観念への批判という点である。その批判を以下のように評者なりにまとめておく。

その一　性文化に対する儒学的な虚偽的な観念への批判。

「生命誠可貴、愛情価更高」というような西側の観念に対し、中国では「万悪淫為首」という性観念は古代から現在に至るまで支配的であると本書に指摘されている。「万悪淫為首」という観念の虚偽的な性格そのものは、古代社会の「三宮六妃」、「三妻六妾」制度、現代社会における合理的だと見なされ権威と結び付いた一部の上層部の淫らな性行為、さらには性に対する虚偽的な人格は一般民衆にも影響を与えており、それを民衆社会に定着させること、というものであると著者は指摘する。

例えば、高齢化を迎える現代社会における高齢者の結婚の種々の障害について、筆者は「当事者たちの子女が当事者たちの正当な権利を『不健康』な性的要求としてみなし、このため、高齢者の結婚は当事者の子女にとっては何よりの恥となる。このこと自体はまさに『万悪淫為首』という観念と結び付ける虚偽的な人格によるものである」と指摘している。

その二　「万悪淫為首」に関連づける抑圧された女性の性的な位置付けへの検討。

本書においては、一人の性対象である皇帝が持つ「三宮六妃」、一人の夫の夫権下に置かれる「三妻六妾」、夫を失って再婚せずにいた女性のために建てた「貞潔牌坊」などのような絶対的に性の忠誠を保たなければならぬというような女性の性的地位を、文献資料に基づいて展開しており、その上にそのようにされた女性の性的地位のいずれも「万悪淫為首」という観念と結び付いた虚偽的な人格によるものであると批判している。

その三　「万悪淫為首」という観念のもとにもたらされた悪い結果の披露。

「淫・不潔」とみなされる「性」に及んだすべてのもの対して「不聴・不看・不問」（聴かない・見ない・問わない）というのが道徳的であり、さらにそれが「心霊上的牌坊」として民衆化されてしまう。ただし、それは表面化されたものにすぎず、現代社会にさえ珍しくない「新婚初夜の不良な行為」（新婚の夜に新夫の行為が新婦に不良な行為と見なされ、その上新夫を〝無癩漢〟として公訴すること）という無知蒙昧こそは民衆の心の深層に建てられる「心霊上的牌坊」そのものであると指摘する。

そして、このような一般民衆の性に対する無知蒙昧な状態を改善するために、性知識の正否などを判別できるようにという指摘を受け、学校で設けていた「性教育」ということも「不潔なもの」として発展途上に留まっていると指摘している。

その四　「万悪淫為首」という観念からもたらされた反対像。

「万悪淫為首」という観念を強く主張すればするほど、これまで神秘化され抑制されていた性観念が市場改革の潮流に伴い、かえって逆の方向に導かれていくような結果をもたらしてきたと指摘している。すなわち、一九九〇年代以降、「万悪淫為首」という観念が時代遅れとされて、現代においてはそれは当然批判すべきものであるという極端な認識のもとに、性書籍などの氾濫、性に対する自由観念の正当化などのような現象も一般に見られてきたと指摘している。

その五　著者は上記のような批判を通して次のような結論に至っている。

「中国社会の歴史の中では、性は否定されたものであり、性文化は一種の非性文化である。性は拡散されたものであり、性文化は一種の氾濫的な文化である。性は独占されたものであり、性文化は一種の〝上層部〟文化である。性は禁忌されたものであり、性文化は一種の『ブラックホール』（〝黒洞〟＝暗闇）文化である」。

㈢　本書を通して
啓発される点について

その一　伝統文化における中国の性文化の位置付けと本書の意味について。

本書を通して、評者は中国の性文化そのものが、儒学的な正統文化、およびその影響を受けた中国社会によって、否定されたり、攻撃されたり、曲解されたり、乱用されたりして非文化的なものとされてきたという印象を受けた。これは、本書を除き、性文化がこれまで中国国内で出版された伝統文化に関するシリーズに含まれてない原因、およびその他の関連研究よりその成果がすくない原因の一つではないかと考える。そのため、性文化

を中国伝統文化という範疇において体系化した研究はこれまでないに等しかったとも言えよう。

そして、本書は「儒学的な道徳への批判」という思想を表面に持ち出しているわけではないが、「万悪淫為首」という儒学的な観念を批判する視点が全書に一貫されていること自体は、「儒学批判」ともなっているのではないかと、評者は考える。この意味では、本書を二〇世紀初期の「五・四運動」に先立った一九一五年以来の「新文化運動＝儒学道徳批判」という思潮の一種の継続でもあると、位置付けることができる。

その二　研究方法について。

本書が歴史文献や現代社会に対する調査資料やデータに基づいてまとめられた成果であるため、評者は膨大な資料検索の手がかりを得た。もし、一九九〇年代半ばまでの研究環境が緩やかであれば、厳密な意味をもつ性文化の構成体系に基づいての成果も出来上がるのではないかと考える。本書の出版事情を考慮すれば、一九九〇年代半ばまでの性文化に関する研究において本書は評価に値するといえる。

評者が知り得ている範囲では性文化の構成体系は、(1)性活動を実現する系統――性的な行為方式、(2)性活動を規定する系統――性に関する法律・性道徳・宗教的な性戒律・性の禁忌、(3)性活動の補償系統――性活動に関連づけられる精神的な活動、(4)性活動を理解する系統――性教育・性医学・性科学など、というような諸分野に及ぶものであろう。

今後、人類学や歴史学、心理学、文化史、社会史、芸術学さらには法学的な諸分野の視点によって中国性文化を再考察・再評価していくことができれば、本書よりも一層の成果が多く出てくるのではないか、そして、このような広い視野を必要とする研究を中日両国の関連研究者が共同で進めることができれば、より理想的ではないかと思われる。

〈1〉　ここで引用した「序文」の内容は、評者が同書の中国語訳本をもとに日本語に翻訳したものである。

この書評の校正中に、*Sexual Life in Ancient China*の日本語訳本『古代中国の性生活――先史から明代まで』を入手し得た。ここでは読者の参考とするため、評者の引用した部分と同一内容にあたる箇所を紹介しておく。

「……。中国人のように文化度が高く思索的な民族では十分予想されるように、かれらが古来性的な事柄に多くの注意をはらっていたのは確かである。かれらの観察は「性の手引き書」、すなわち一家の女たちとの関係をどう処理するかを家長に教える教範として具体化した。こうした書物はすでに二千年前に存在し、十三世紀頃までは広く研究されていた。そのの儒教的なピューリタニズムが次第にこのジャンルの文献の流通を抑制するようになった。そして一六四四年の清王朝出現の後、政治的感情的要素によって強化されたこのピューリタニズムが性的な事象にかんする前述の秘密主義を生み、それはその後つねに中国人につきまとった。清の文人学者たちは、この秘密主義が常時存在していた、両性の厳格な分離が二千年前すでに全面的に実施されていたと主張した。……」(『古代中国の性生活』松平いを子訳、せりか書房、一九八八年、序文、九頁より)。